



「自立」を考える

新潟県特別支援教育研究会
副会長 佐藤 人志

「自立」という言葉を聞くと、ある方の言葉を思い出します。

「自分から動ける子になってほしかった」

お子さんは、特別支援学級に在籍し、担任や交流学級の子どもたちにも丁寧に関わっていただいたそうで、本人はとても居心地がよかったです。しかし、卒業後の本人の様子から、「学校で主体的に動くことを身に付けてほしかった」と話されています。

さて、今回の特別支援学校学習指導要領等の改訂のポイントの一つに、「自立と社会参加に向けた教育の充実」があげられています。自立活動の教育課程上の位置付けを把握した上で、自立活動の指導に当たらなければなりません。

そこで、改めて「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編(平成30年3月)」を読んでみました。「自立活動の指導は、個々の幼児児童生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服し

ようとする取組を促す教育活動であり、個々の幼児児童生徒の障害の状態や特性及び心身の発達の段階等に即して指導を行うことが基本である。」と書かれています。自立活動の内容として、6つの区分は従前と同様ですが、発達障害や重複障害を含めた障害のある幼児児童生徒の多様な障害の種類や状況等に応じた指導を一層充実するため、「健康保持」の区分に「(4) 障害の特性の理解と生活環境の調整に関すること」の項目が追加されています。また、自己の理解を深め、主体的に学ぶ意欲を一層伸長するなど、発達の段階を踏まえた指導を充実するために、さらに、感覚を総合的に活用した周囲の状況の把握にとどまることなく、把握したことを踏まえて的確な判断や行動ができるようにすることを明確にするために、一部改められています。

一方、特別支援学級における自立活動では、「障害による学習上又は生活上の困難を克服し自立を図るため、特別支援学校小学部・中学部学習指導要領第七章に示す自立活動を取り入れること」が新たに示されました。また、通級による指導における自立活動でも、前述第7章に示す自立活動の内容を参考とし、具体的な目標や内容を定め、指導を行うものとされています。

障害者の権利に関する条約が求めるインクルーシブ教育システムの推進により、個別の教育的ニーズのある児童生徒に対して、必要な合理的配慮を提供しながら、卒業後の視点を大切にしたいカリキュラム・マネジメントを計画的・組織的に行い、自立と社会参加に結実させたいものです。

令和2年度 主な事業報告

○理事会・評議員会

- 第1回理事会・評議員会
(紙面による決議)
- 第2回理事会 (紙面による決議)

○研究大会

- ・上越地区 中部大会
(紙上発表による開催)
- ・中越地区 小千谷大会
(中止)
- ・下越地区 村上岩船大会
(中止)

○研究部会

- ・知的障害部
- ・自閉症・情緒障害部
- ・肢体不自由・病弱・身体虚弱部
- ・言語・難聴部
- ・視覚障害部(全研究部の研修会は中止)

○全特連関係

- ・全国・関プロ大会山梨大会
(紙上発表による開催)

○会報

- ・会報121号発行 (7月)
- ・会報122号発行 (3月)

課題の優先順や解決法を意識するようになるためのPBIの実践

新潟県五泉市立五泉東小学校 教諭 溝口 茜

I 提案主旨

1 主題設定の理由

実践の対象児は、6年生の女兒1名（A児）、男児1名（B児）である。

両者とも、学習面では慣れた問題なら用意された解き方の手順カードやヒントカードを参考にしながら問題を解いたり、パターンとして覚えて処理したりすることができる。しかし、初めての課題や応用問題だとどのように解決したらよいか分からずに固まってしまうことがある。

生活面では、長期休業等で学習計画を立てる際、自分が1日にできる量やそれぞれの活動にかかる時間を考えて計画を立てることが難しい。また、計画のとおりに進まず終わらせることができなかつたり、予定の変更等で立てた計画のとおりに進まないとしたらよいか分からなくなり、自分で計画を修正できなかつたりする姿が見られる。

上記の実態を改善するため、これまで授業では教師が問題ごとに解き方の手順カードやヒントカードを用意して様々な問題に触れるようにした。また、児童ごとに誤答の種類を分析して間違いやすい箇所を表で示し、予め確認してから問題を解くようにした。しかし、カードを使いながら問題をたくさん解いても、やはり文章題の文言が変わったり、違う形式の問題になったりすると自力で解決の見通しを持つことが難しかった。

そこで、教師が毎回手順カードや誤答を分析した表を作成するのではなく、学習者である児童自身が問題を解きながら話し合っ手順を書き出したり、間違ったところを確認して表を作成したりした方が有効なのではないかと考えた。実感を伴って自らの学習を調整し、これまでの自分や既存の知識を意識して問題の解決に向かうことができるようになるのではないかと考察したからである。

上記の理由から、児童が自らの学習を調整し、それまでの学習を生かして課題に取り組むことができるように、PBI（Process-Based Instruction）という学習法に基づき、PBIプラン（以下プランと表記する）を作成して課題解決の仕方を学ぶ実践を行った。

2 PBIについて

PBIとは、AshmanとConwayによって提唱された、認知処理過程に注目した教授-学習法である。解決のための手がかりを探してプランを立て、プランに沿って実行し、その結果をモニタリングしてからプランを修正し、確かめを行うことを繰り返す。

今回の実践では、学習時に問題を解くとき、初めて出会う形式の問題であっても今までの知識や経験から解決のための手掛かりを探して問題を解こうとする姿、また日々の生活の中で遊びなど自分がやりたいことと宿題や家事などやらなければいけないこと、時間などを考慮に入れて実現可能な計画を立て充実した余暇を過ごそうとする姿が将来的に見られるようになることを目指す。

そのために、今までに得た知識や経験、自分に合ったやり方を意識して学習できるよう国語と算数の時間の様々な単元で計画を立て、計画→実行→修正→実行を繰り返す実践を行った。この実践では課題を解決するための手掛かりとなるメモや手順、特徴をまとめたものなどを「プラン」、プランを立てるために必要な力を「プランニング」と記載する。はじめにプランやプランニングについての説明やアンケートなどを実施した。2020年1月から国語と算数についてプランを作成したり活用したりする実践を行い、実施前と実施後のアンケートやNRTの結果、活動の様子からその効果を検討した。

II 提案の内容

1 PBIの導入

はじめに現在の実態を担任が正確に把握するため、また児童が学習する時にどれだけ手順や学習方略を意識しながら取り組んでいるか自身で認識するために、PASS評定尺度で自己評価をした（項目については図4の結果を参照）。これはルリアの脳モデルに基づいたPASS理論と呼ばれるプランニング（Planning）、注意（Attention）、同時処理（Simultaneous）、継次処理（Successive）の四つの認知処理過程について、子どもの特徴を知るための評定尺度である。24のチェック項目があり、上から6問ずつプランニング、同時処理、注意、継次処理の特徴に分かれている。左から「よくある、ある、たまにある、ない」の四つから該当するものにチェックを付ける。

実施したPASS評定尺度を見直しながら、課題を解決する時に自分が得意だと感じているところや苦手なところを話し合った。今までの経験から段取りや計画を立てることの大切さや利点を確認し、プランとは何か、プランニングとは何かを説明した後に、それらを踏まえて今後のめあてを立てた。導入後は国語、算数共に単元ごとにプランを作成した。

2 プランを完成させるための手順

児童自身の課題解決のために次の手順でプランの作成と修正の手立てを行う。

- (1) カードにプランの名前を書く。
- (2) 問題を解くために必要なことを、思い付いた順に付箋に書き出す。
- (3) 付箋を話し合いながら手順のとおり並べ替える。
- (4) 作成したプランに沿って問題を解く。
- (5) 必要な手順を書き足したり、自分に合うように修正したりする。

国語の実践

5年『想像力のスイッチを入れよう』では、本文を読んであらすじをおさえた後、事例、意見とは何かを確認した。児童の発言を教師がまとめ、文章を事例と意見に分ける手掛かりとして、事例と意見の特徴をまとめたものをプランの手本として作成し提示した（図1）。その後、そのプランを見ながら本文を事例、意見に分けていき、文章全体の構造を確かめた。その際、教師が縮小本文に色分けをして、児童と書いてある内容を確認しながら大切なところをまとめた。

6年『私たちにできること』では、教科書で単元の大まかな学習計画や活動の流れを確かめた。教師が「提案する時には二つ書くことがあったよね。」と促して、提案する文章には提案のきっかけと提案内容が必要なこと、またその時に気を付けることなど教科書を見ながらまとめるよう指示し、提案する時に必要な事柄についてのプランを児童が作成した。またその後、作成するポスターはどんなレイアウトで何をどんな手段で伝えるか、インタビューのメモやポスターの例も参考にしながら、ポスターを作るためのプランを児童が作成した（図1）。「さっきの配置よりもこの流れで書いた方が自然だね。」「これは1年生が習っていないから、イラストで何個分と描いた方が分かってもらえるかもしれない。」「これは写真の方が分かりやすいから先生に頼もう。」とお互いに話し合いながら、また付箋を並べ替えたり先に作ったプランを参考にしたりしながら作成している姿が見られた。

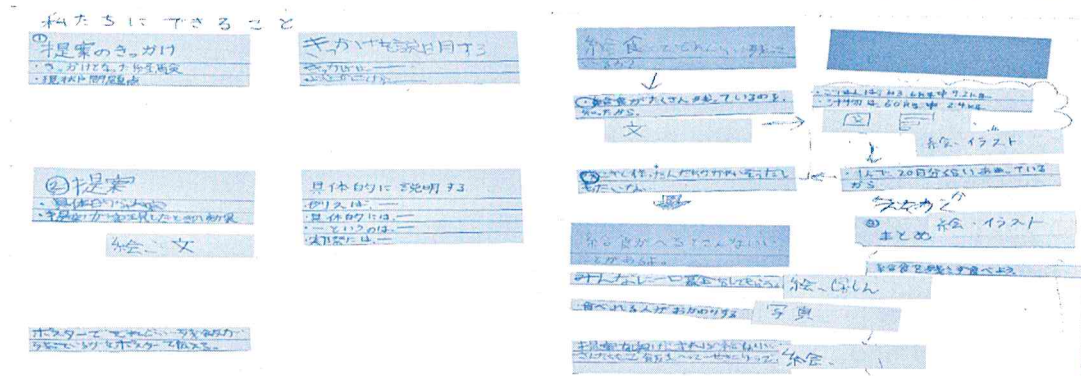


図1 児童2名で作成した『私たちにできること』のプラン

4 算数の実践

5年『図形の面積』では、面積の求め方を学習した後に児童に問題を解くために必要なことを思い付いた順に発言してもらい、教師がそれを付箋に書いた。その後児童が付箋を並べ替え、その手順とおりに教師がカードに書きプランを作成した。算数は、どの単元でも作成したプランに沿っていろいろな問題を解いた後は、間違いやすいポイントを教師が精選し表にまとめた。その表に自分が間違えた原因を正の字で数えてまとめ、自分が間違えやすい所を意識してテスト練習を行った。テスト時は公式等が書いてある所を消し、プランを見ながら問題を解いた。

6年『分数÷分数』では、計算の仕方を学習した後、初めて教師が指示を出さずに児童が最初からプランを作成した。分数×分数のプランを参考にしながら手順を書き出した。A児は途中で「問題解きながら（手順を）考えた方が漏れないかも。」と言い、一問実際に問題を解きながら手順を書き出していた。「ぼくは言葉の式の方が良いから…」「私は…」と自分が一番間違えにくい考え方で立式の前の手順をそれぞれ自分達で書き分けていた（図2 左：A児，B児）。単位の書き忘れや問題の読み逃しが多いB児は、書き終わった後「見直ししよう。」と作成したプランと教科書のまとめを見比べ、最後に「見直しをするって書いておこう。」とプランに自分で書き足していた。この頃には誤答分析表も、児童が自分達で宿題等から間違えやすい所を自分で探し、対策を考え自分なりの対策法を書いていた（図3 上からA児，B児）。

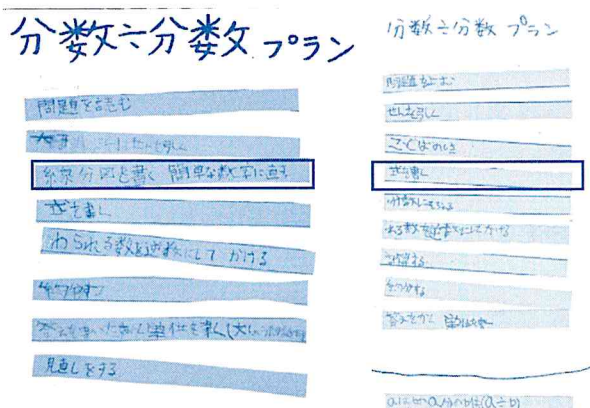


図2 『分数÷分数』のプラン

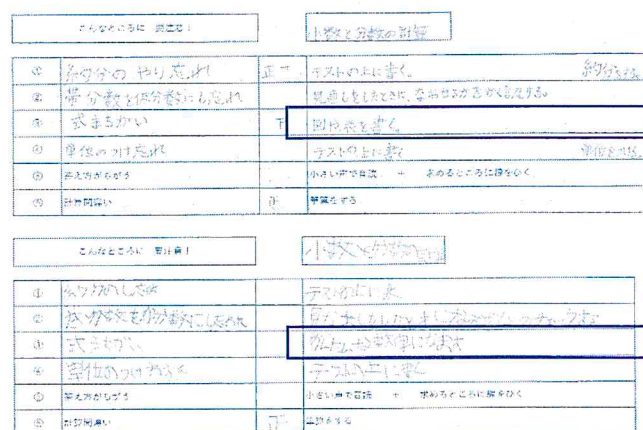


図3 『小数と分数の計算』の誤答分析

Ⅲ まとめ

1 評価の仕方

この学習の導入時と終了時に担任、また児童でPASS評定尺度を実施し、その評価を他者評価、自己評価としてどのように変容が見られたか比較した。また、実践を開始した頃から実践終了時までのNRTの結果、長期休業時の生活表や学習計画の様子を見取り、変容を評価した。

2 成果と課題

PASS評定尺度は、2名とも主にプランニングと継次処理の項目で実施前より肯定的な評価が多くなった（図4）。○が実施前、●が実施後、網掛けの部分で以前より評価が肯定的になった項目である。プランニングについては、今回の実践を通して以前より自分で解決法を考え、計画を確認して修正したりするようになったと思われる。継次処理も肯定的な評価が多くなった要因については、プランを作成する際、毎回手順や順序を考えたことによって、課題を解決する際に以前よりも順番を意識するようになったからだと思われる。

生活面について、A児は始業式に持参する持ち物の確認を「毎回夜やると慌てるから前日の15時にやる。」と自分で決めて取り組む姿が見られた。B児は夏季休業中の課題について当初総ページ数を日数で割った分やる計画にしていたのを、それまでの経過を参考にしながら自分の性格を考慮して「毎日1ページは必ずやる。やる気がある日にたくさんやる。」と計画を練り直す姿が見られた。両者とも課題に全て取り組み、提出物忘れも無かった。

	よくある	ある	たまにある	ない	よくある	ある	たまにある	ない
1. 問題を解くとき、やり方や考え方を意識してやっている。	●	○				○●		
2. 作業をするときに、やり方を考えたり、必要なものを選んだり、計画を立ててから始める。		○●				●	○	
3. 何かをするときに、うまくいっているかどうか確かめながら(ふりかえりながら)やっている。	●		○			●	○	
4. 何か思いついたら、行動する前にまず考える。		●	○			●	○	
5. 問題を解いたり、何かを計画したりするとき、いろいろなやり方を考えられる。		○●				●		○
6. 集中したいときやイライラしたときに、自分の気持ちをコントロールすることができる。	●		○		●	○		
7. 地図を見たり、図形の問題を解いたりして空間を使う活動がとくいである。		○●						○●
8. 物事のでているところや同じところを見つけ、なま分けすることがとくいである。		○	●			●		○
9. 問題を見たり読んだりするとき、全体がどうなっているか分かる(はあくでできる)。		●	○			●	○	
10. 一度にいろいろな指示をされても(口で、言葉で)、うまく理解できる。		○	●				●	○
11. お手本があれば、それを見ながらうまく取り組むことができる。		○●			○●			
12. 絵や図、写真、文字など目に見えるものを使うと、分かりやすい。	○	●			○	●		
13. 一つのことを始めたら、他のことに気を取られないで、最後までそのことを続けていられる。			○●			○	●	
14. まわりの人やもの、音などを気にせずに作業できる。			○●		○	●		
15. 絵や図、文章など、細かいところまで見落とさず、よく観察できる。		○●					●	○
16. 他のことに気をとられないで、人の話を聞くことができる。		●	○			○	●	
17. 同じ作業を長い時間、ずっと続けることができる。		○●				●	○	
18. さわがしい(にぎやかな)場所でも、自分のすべきことをうまくやれる。		●	○			○●		
19. 整理やマット運動の体の動きなど、自分でやり方や順番を考えて、作業することができる。		●	○		●	○		
20. 説明書通りにおもちゃを組み立てるなど、説明書や手順書を見ながら、順番に作業していくことができる。	●	○			●	○		
21. 朝起きて学校に来るまでにしたことなど、自分のしたことを正しく順番に思い出すことができる。	●	○			●	○		○
22. 計算の順番やとび箱をとぶときの連続した体の動きなど、順番に言われた指示を理解できる。	●		○		●	○		
23. 聞いたことを順番に正しく繰り返して話すことができる。	●	○			●			○
24. 計算ドリルの次に、漢字ドリルをして、読書の本を読む、など言われたことをその順番で正しくやることができる。		●		○		○●		

○：実施前1/10 ●：実施後7/20 網掛け：左に推移

図4 PASS評定尺度の自己評価の推移(左がA児、右が評価のみのB児)

出典：『DN-CASによる子どもの学習支援-PASS理論を指導に活かす49のアイデア-』(*1参照)

※ 日本文化科学社より許可を得て改変転載 Copyright © 1997 by Jack A. Naglieri

NRTは、2名とも算数で10以上の向上が見られた(表1)。これは、算数は計算の仕方以外の問題を読む、大切なところに線を引く、図を描くなどの手順は他の単元と大きく差異がなく、繰り返すうちに手順についてのプランの作成、そして解き方に慣れてきたことが考えられる。対して、国語では算数ほど向上が見られなかった。国語は書く、読むなど領域によって活動のねらいが異なること、また実施期間中に同じ領域の学習を算数ほど繰り返し行わなかったことから、プランを作成して同じ領域間で共通する要点を把握しにくかったり、次回の単元に活かしにくかったりしたことが、その原因として考えられる。

表1 NRTの偏差値 変化の様子(6年生児)

	A 児	B 児
国語偏差値	5年生時に比べ±0	5年生時に比べ-2 ※但し5年時は4年生用の内容で実施
算数偏差値	5年生時に比べ+12	5年生時に比べ+16

今後の課題は、国語についても更に「その単元で身に付けさせたい力」を明確にして児童と共有し、同じ領域の前後の単元との関連性を意識させていくことである。より一層生活に生きるような学習活動ができるように、研修を積んでいきたい。

参考文献

- *1 J.A. ナグリエリ, E.B. ピカリング著, 前川久男・中山健・岡崎慎治訳『DN-CASによる子どもの学習支援-PASS理論を指導に活かす49のアイデア-』(日本文化科学社) 筑摩書房, 2010年
- *2 エードリアン F. アッシュマン, ロバート N.F. コンウェー著, 渡部信一訳『教室で役立つPBIの理論と実践』(関口豊) 田研出版株式会社, 1994年

知的障害特別支援学校における教育活動を豊かにするための取組

～iPadの導入と活用～

新潟県妙高市立総合支援学校 教諭 榎谷 聡

I 提案主旨

当校は知的障害特別支援学校で、児童生徒数は小・中・高等部合わせて38名、職員数は35名である。ICT機器については、昨今、合理的配慮及び基礎的環境整備の観点から多くの学校で有効活用されている。特にiPadは操作が容易で、視覚的、聴覚的にも多様な表現が可能である。また、魅力的な教育支援アプリも多いため、活用を工夫することで児童生徒にとって有効な教材・教具となる。そこで、当校では、iPad利用の研修と実践を積み重ね、iPadの活用方法について検討するとともに、多くの職員がiPadを使えるように校内環境を整備して、教育活動への導入を進めていきたいと考えた。

II 提案の内容

1 対象・期間・方法

- (1) 実践者の立場…研究主任及び情報教育部主任
- (2) 対象…高等部（小・中学部の実践も掲載）
- (3) 期間…平成31年4月～令和2年3月
- (4) 方法…各クラスで実践を行い、パワーポイントにまとめる（1実践1スライド）。令和2年3月に当校の全職員を対象に、iPadの使用頻度や成果と課題についてアンケート調査を行った。

2 環境整備

(1) 情報機器の管理

iPad 9台とアクセスポイント4台を職員室で一括管理した。使用する場合はホワイトボードに使用者の氏名を記入して教室等で使用するようにした。iPadには児童生徒が持ち運びできるように持ち手つきのカバーを付け、ケースに収納して保管した。アクセスポイントも同様にケースに入れて持ち運んで使用するようにした。

(2) 周辺機器の整備

iPadの画面をテレビのモニターに映し出せるようにするために、専用のHDMIアダプタやVGAアダプタを整備した。iPadからプリントアウトできるように専用のアプリをインストールし、インクジェットプリンターとWi-Fi接続できるようにした。タッチペンを整備し、文字学習アプリで使用できるようにした。

(3) データ転送手段の整備

USBケーブル（iPadからパソコンにデータ転送が可能）の他に、iPadとパソコンの双方向にデータ転送が可能なフラッシュドライブメモリ、デジタルカメラからiPadへのデータ転送ができるライトニングSDカードカメラリーダーとライトニングUSBカメラアダプタを整備した。iPad同士でデータ転送するためにAirDropの設定をした。

(4) アプリのインストール

iPad導入時に有料アプリ「Droptalk」「平仮名おけいこ」「こどもレター」を当自治体に依頼して事前にインストールしてもらった。その他に、無料アプリをApp Storeからインストールして使用した。

3 校内ICT研修



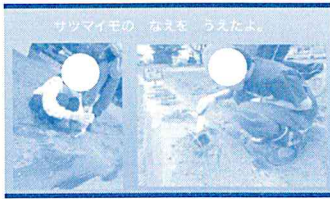
校内研修として平成30年～令和2年の間に計4回、新潟市障がい者ITサポートセンター（以下IT

サポートセンター)に講師を依頼し、研修会を行った。

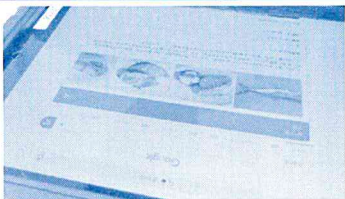


- (1) 平成30年12月…当校にiPadが導入される以前に学校に講師として招き、「平仮名おけいこ」や「こどもレター」等の教育アプリや360度カメラなどのハイテク機器の有効な使い方について紹介をしていただいた。
- (2) 令和元年6月…iPad導入後、「Zoom」によるオンライン研修を開催した。ITサポートセンターと当校とをオンラインでつなぎ、「遠隔だからできること、遠隔でもできること」「iPadの個人購入を進める際の手立て」等についてお話しいただいた。
- (3) 令和元年7月…当自治体の教育研究会と兼ねる形でICT研修会を開催した。当校の高等部と中学部の実践発表に対して指導していただくとともに、「アナログの方が良いこと、ハイテクの方が良いこと」「困難さや弱さを補助するサポートツール、学びの質を高めるツール」についてお話しいただいた。その他、ノイズキャンセリング機能付きのヘッドフォンやアナログの支援ツールについても多数紹介していただいた。
- (4) 令和2年8月…昨年と同様に当自治体の教育研究会と兼ねる形でICT研修会を開催した。新型コロナウイルス感染予防のため、密になる一会場での研修を避け、一般校8校を含むZoomによるオンライン研修会を開催した。FaceTimeによる特別支援学校の中学部と中学校の交流授業の実現や高校の長期入院生徒の遠隔授業による単位取得など、令和元年12月に文部科学省が打ち出した「GIGAスクール構想」を受けて、遠隔授業の必要性が増したことについてお話しいただいた。また、小中学校及び特別支援学校小学部と中学部の1人1端末の整備に向けて、音声付き教科書の使用や新しいノートテイク(写真記録、録音記録など)の在り方についてもお話しいただいた。

4 実 践




(1) カメラ、iMovie (標準アプリ)

授業	①読み聞かせの振り返り	②お掃除検定の練習	③1学期の振り返り
学部	高等部(普通)	高等部(普通)	小学部
内容	活動の様子を撮影したビデオを活動後に確認しながら自分の動きや話し方を確認し修正することができた。	ほうきの持ち方や動かし方を動画で撮影し、その場でチェックした。同じ角度から再度撮影することで1回目との比較することができた。	職員が、1学期の学習の様子を写した写真や動画をiMovieで編集し、1学期の振り返りの授業で使用した。
			

(2) Safari (標準アプリ)

授業	①食べ物調べ	②折り紙の折り方調べ	③衣服の畳み方調べ
学部	高等部(普通)	中学部	中学部
内容	食べ物を食品群で色分けする授業で、生徒がGoogleサーチを使って食品について調べることができた。	生徒が休み時間に音声認識機能を使って折り紙の折り方を検索し、動画を確認しながら折り紙を折ることができた。	生徒が個別の課題学習の時間に音声認識機能を使って衣類の畳み方を検索し、動画を確認しながら衣類を畳むことができた。
			


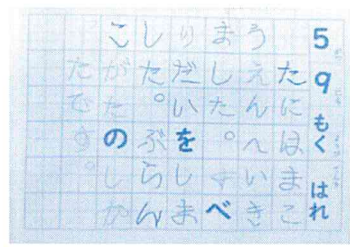
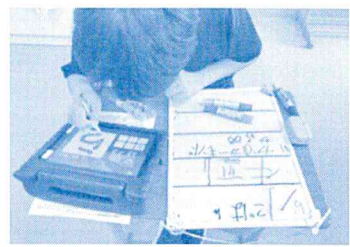
(3) DropTalk (有料アプリ)

授業	①職業生活の発声練習	②職業生活反省会	③授業の流れの確認
学部	高等部 (普通)	高等部 (重複)	中学部・小学部
内容	発声練習の号令で、生徒が番号を順番にタップして音声を流した。文字を読むことが難しい生徒や人前で話すことが苦手な生徒でも号令を掛けることができた。	反省会の場面で発語のない生徒が、作業の写真をタップすることで、活動を振り返り、頑張ったことを発表することができた。	職員がスケジュールキャンパス機能を使って授業の流れや活動時間などを生徒に事前に示した。
			

(4) Zoom (無料アプリ)

授業	①音楽の授業	②始業式, 終業式	③修学旅行
学部	高等部 (重複)	高等部 (普通・重複)	高等部 (普通・重複)
内容	自閉的傾向が強く教室移動が難しい生徒のために、音楽室と教室をオンラインでつなぎ、教室にいても音楽の授業を受けられるようにした。	人が大勢いる場所が苦手だが、友達の発表が見たい生徒のためにZoomでプレイルームの式の様子を教室にオンライン中継した。	修学旅行先と学校をZoomでつなぐことによって、生徒が旅行先の感動を学校にいる後輩たちに伝えることができた。
			

(5) その他

授業	①家庭生活	②個別の課題学習	③個別の課題学習
学部	高等部	中学部	高等部・中学部
アプリ	Room Planner (無料アプリ)	こどもレター (有料アプリ)	平仮名おけいこ (有料アプリ)
内容	アプリで立体的に自分の部屋作りをすることができた。卒後に家庭以外の場所で過ごす「自分」をイメージし、一人暮らしへの「わくわく感」を感じることができた。	なぞり書きしたものを印刷し、他校との交流会で使用した。絵日記にも書字の学習にも役立った。	字形や運筆を学習するための反復練習に使用した。うまく書けると音が鳴ったりイラストが動いたりするので学習意欲が高まった。
			

Ⅲ まとめ（成果と課題）

1 アンケート調査の結果

職員のアンケート調査の結果、使用頻度に差があるが、約8割の職員がiPadを教育活動で使用していたことが分かった。成果と課題のまとめは以下のとおりである。【成果】…iPadはその場ですぐ使えるため学習効率が高い（特に動画・写真の撮影・編集・視聴など）。児童生徒の活動への意欲や主体性が高まり、特に発語の無い児童生徒の活動参加を促すことができる。「Zoom」によって遠隔での間接的な活動参加を実現できる。職員の教材・教具としての広がり、児童生徒の余暇の広がりが期待できる。【課題】…児童生徒数や職員数に対してiPadやアクセスポイントの台数が不足している。ゲームや遊び等を中心に使用している場面があり使用目的が不明確なことがある。職員間で使用頻度の差やスキルの差が児童生徒への支援・利用機会の差になっている。YouTubeなどの動画視聴に固執してルールが守れない児童生徒がいる。

2 環境整備について

iPadとアクセスポイントの数は決して十分ではなかったが、職員間で共有しながら多くの授業場面で使用できた。しかし、撮りためた画像や動画の保存場所及び方法、アップデートの方法やセキュリティの強化、メンテナンス等については今後検討していかなければならない。職員の使いやすさと安全に正しく使うための管理を両立させるためには、学校全体としての情報機器管理システムの構築が必要不可欠であると考ええる。

3 職員研修について

ITサポートセンターの協力のもとで開催された研修会を通して、ICTの新しい技術と実践について多くの知見を得ることができた。また、「Zoom」によるオンライン研修は、新型コロナウイルス感染予防の観点からも有効であった。職員からの質問にも丁寧に答えていただき、YouTubeなどの動画視聴に固執してしまう児童生徒に対して「終了時間の少し前に予告すること」や「教育活動の中で興味を持てるものを増やすこと」など、具体的な場面に即した対処方法を多く学ぶことができた。

一斉研修だけでは補えない職員間のスキルの差をどのように埋めていくかが、今後の課題の一つである。当校では学部毎に自主研修会が開かれ、校内の理解度が高い職員からアプリの使い方を教えてもらうなど、主体的に学ぼうとする雰囲気が高まっている。情報教育部でも職員専用のICT利用法のページを開設し、iPadの初歩的な操作からアプリの使い方などを動画にして配信している。このように、今後は一斉研修の内容の充実とともに個々のスキルに応じた学び方も推奨していくことが重要である。

4 実践について

ICTの活用は当初、高等部の校内研修として取り組む予定であったが、小中学部の実践も多く集まり、最終的には全部で53の実践が集まった。

「カメラ」や「iMovie」、「Keynote」などは事前指導や活動の振り返りのために多く使われた。「DropTalk」では、児童生徒の実態に応じたコミュニケーションボードやスケジュールボードなどを提示することができた。検索アプリの「Safari」は音声検索機能によって調べ学習を容易にし、子どもの主体的な学習を助けた。テレビ会議アプリの「Zoom」によって集団の場が苦手な生徒でも、別教室から授業に参加することが可能になった。児童・生徒が使う学習教材としては「こどもレター」や「平仮名おけいこ」などがあげられる。この他にも児童の実態に応じて様々なアプリを使用した実践が行われた。いずれも児童生徒の困難さや弱さをサポートし、学びの質を高めるツールとして活用できた。

本実践では比較的多くの職員がiPadを教育活動で使用し実践も多数集まったことで、無理なくiPadの導入を進めることができたと考ええる。しかしながら、活用方法については学習指導要領の目標や内容と照らし合わせながら検討することが必要である。「GIGAスクール構想」に伴い、当自治体では今年度末から来年度にかけて1人1台iPadが整備される。効果的に使うことによって子供たちの可能性をさらに広げることができると考える。そのための環境整備や職員研修の充実、さらに実践の積み重ねが一層重要になると考える。

祝 全日本特別支援教育研究連盟功労者表彰

新崎俊博様

(前副会長 前上越市立南本町小学校校長)

長年にわたり、当県の特別支援教育の発展に貢献され、全国大会で表彰されました。

令和2年度全特連関プロ山梨大会 紙上発表による開催に原稿を寄せて

五泉市立五泉東小学校

溝口 茜 教諭

第6部会「生活に生きる学びを大切に
した教科指導」で誌上発表をさ
せていただきました。学びの
自己調整ができるように、
単元ごとにプランという手
順書や手掛かりを、子ども
たち自身が作る実践を行
いました。

妙高市立総合支援学校

梶谷 聡 教諭

学校全体でタブレット端末
を活用した実践をまとめ
させていただきました。実践
を投稿して下さった先生
方と研修にご協力いただ
いた新潟市障がい者ITサ
ポートセンターの山口俊
光様に感謝申し上げます。

令和3年度新潟県特別支援教育研究会 事業予定 (県内関係)

地区別特別支援教育研究大会

上越地区大会北部大会

8月6日(金) リージョンプラザ上越 他

中越地区大会長岡大会

11月25日(木) 長岡市立劇場 他

下越地区大会新潟市大会

11月25日(木) 新潟市立江南区文化会館

佐渡地区研究大会

8月23日(月) 金井コミュニティセンター

新潟県特別支援教育研究会

研究部研修会

- 知的障害部会
- 自閉症・情緒障害部会
- 肢体不自由・病弱・身体虚弱部会
- 言語・難聴部会
- 視覚障害部会

※ 各部会において、オンライン
又は対面での講演会を予定。

全特連・第43回発達障害教育 夏季セミナー新潟大会

令和3年8月16日・17日

新潟日報メディアシップ

1日目講師

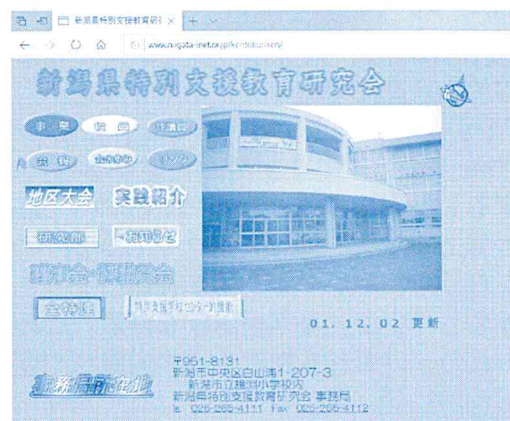
佐藤 慎二 植草学年短期大学教授

伊藤 一美 星槎大学大学院准教授

2日目講師

長澤 正樹 新潟大学教職大学院教授

名古屋恒彦 植草学園大学教授



県特支研のホームページ

URL <http://www.niigata-inet.or.jp/kentokusiken/>
メールアドレス tokusi@niigata-inet.or.jp

編集後記

県特支研だより「No.122号」をお届けいたします。本会報より、関プロ山梨大会に提案された原稿に合わせて、横書きとさせていただきます。お忙しい中、多くの皆様から、玉稿を賜りました。感謝申し上げます。本号が新潟県の特別支援教育の一助となることを願っております。